

# 西宮市文学史年表

作成：河内 厚郎（文化プロデューサー）

大化 3年(647)『撰津国風土記』に、御前の濱(広田社前の海浜)・武庫の記述。

『万葉集』が「津努(津門)の松原」「名次山」「武庫の浦」「武庫の海」「武庫河」「武庫のわたり」等を詠む。

承安 2年(1172)広田神社で歌合が催される。(判者は藤原俊成)

弘安 9年(1286)『太平記』に西宮での合戦の記述。

西宮神社や蛭子神信仰にもとづく狂言『釣女』『蛭子大黒殿』『夷毘沙門』等が作られる。

元禄末年(1704) 今津出身の儒学者、加藤良斎が『一昔話』を著す。

大正15年(1926) 金子光晴『水の流浪』に当時の西宮港が詠まれる。

昭和 3年(1928) 谷崎潤一郎『卍』は香櫨園が舞台。

昭和 4年(1929) 北尾鯨之助『阪神風景漫歩』に阪神間の風景と雰囲気が描かれる。

富田碎花『阪神沿線』が当時の阪神間の暮らしびりとモダンな風景を紹介。

昭和 6年(1931) 合作、江戸川乱歩『江川蘭子』の作者の一人、横溝正史が妖艶な女性「蘭子」を阪神間育ちとして設定。

中村憲吉『軽雷集』に夙川の方鉾(かたほこ)池あたりが詠まれる。

森田たま『夙川雑筆』『故郷の味』(後年「もめん随筆」に収録)に西宮を中心に当時の阪神間の様子や、暮らしびり、価値観等が紹介される。

天長6年(829) 門戸厄神・東光寺創建  
天長8年(831) 甲山大師・神呪寺開基・建立  
天長10年(833) 鷲林寺・建立

西宮神社・大練堀(日本三大練堀の中で最古) 西宮神社に仕える傀儡師(人形遣い)が、えびす信仰を広める。西宮出身の毛利重能が「和算の祖」として活躍。西宮出身の名優、嵐三右衛門が大坂歌舞伎の祖となる。

宝暦5年(1755) 飯田桂山が今津に学問塾・大観楼を開く。

文化7年(1810) 今津に灯台(現存する日本最古の灯台) 天保8年(1837)「宮水」発見。一説には天保11年(1840) 文久元年(1862) 名塩に蘭学塾が開かれる。

明治15年(1882) 今津に六角堂が建つ。

明治21年(1888) 西宮市浜町に辰馬喜十郎邸(日本人の手による日本初の洋館)完成。

明治43年(1910) 薄田泣菫が西宮に定住(のちに分銅町「雑草園」に居住)

大正12年(1923) 甲陽園に東亜キネマの映画スタジオ開設(佐藤紅緑らが活躍)

大正13年(1924) 甲子園球場が建つ。

大正14年(1925) 詩人・喜志邦三が神戸女学院で教える。

昭和3年(1928)『キネマ旬報』が香櫨園で編集される。

昭和4年(1929) 関西学院大学が上ヶ原に移転。

昭和5年(1930) 甲子園ホテル開場、関西の社交場となる。

昭和6年(1931) ホテルパインクレストが殿山町に開業。

昭和8年(1933) 神戸女学院が岡田山にキャンパスを移転。

苦楽園の下村海南邸がサロンとなる。

<p>昭和 8 年 (1933) 与謝野晶子『沙上』に阪神間の風景が多く詠まれる。</p> <p>昭和 10 年 (1935) 衣巻省三『黄昏学校』に当時の女学校を含めた阪神間の雰囲気を描かれる。</p> <p>昭和 11 年 (1936) 与謝野晶子『霧閣雲窓章』に、芦屋から苦楽園を抜け、六甲山の風景を詠む。</p> <p>昭和 17 年 (1942) 竹友藻風『鶴鴉』に武庫川の風景が描かれる。</p> <p>昭和 21 年 (1946) 織田作之助『六白金星』に香櫨園周辺、香櫨園海岸が出てくる。</p> <p>昭和 22 年 (1947) 田宮虎彦『江上の一族』に西宮やその周辺の酒蔵が描かれる。</p> <p>昭和 24 年 (1949) 由起しげ子『本の話』では、ミモザの咲く関西学院の裏山が作品の雰囲気を決めている。</p> <p>井上靖『獵銃』は、女性語りとかタカナの多いハイカラさで当時の阪神間の雰囲気を伝える。</p> <p>井上靖『闘牛』は阪神球場が舞台(モデルは西宮球場)。</p> <p>昭和 25 年 (1950) 久坂葉子『灰色の記憶』に阪神間の女の子のハイカラな生活が書かれる。</p> <p>昭和 27 年 (1952) 井上靖『貧血と花と爆弾』に、西宮球場を音楽会の会場に使用し、民間放送の開始の記念とする催しが描かれる。</p> <p>大岡昇平『酸素』は戦後の阪神間が背景。</p> <p>井上靖『春の嵐』が、西宮で育った女の語り調で終戦直後の大阪近辺を描く。</p> <p>昭和 28 年 (1953) 庄野潤三『流木』に関西学院の学生の恋愛と就職が描かれる。</p> <p>昭和 29 年 (1954) 井上靖『あした来る人』に香櫨園在住の実業家(杉道助がモデル)が主役として登場。</p> <p>昭和 30 年 (1955) 遠藤周作『黄色い人』に戦時中の阪神間や阪神大水害が描かれる。</p> <p>昭和 31 年 (1956) 井上靖『射程』に甲子園ホテルや夙川の河口が登場。</p> <p>昭和 34 年 (1959) 佐藤愛子『愛子』に当時の阪神間のモダンな嗜好が描かれる。</p>	<p>昭和 12 年 (1937) 阪急西宮球場開場。</p> <p>昭和 13 年 (1938) 阪神大水害(『細雪』『黄色い人』に描かれる)</p> <p>「昭和の源氏物語」とも言われる谷崎潤一郎『細雪』にマンボウ(平松町)・一本松(常盤町)が登場。</p> <p>昭和 24 年 (1949) 武庫川学院女子大学開学。</p> <p>昭和 25 年 (1950) 西宮市高松町に日芸会館が開場。劇団民芸が「かもめ」(チーフホフ)で旗揚げする。</p> <p>武庫川学院女子短期大学開学。</p> <p>聖和短期大学(現・関西学院聖和短期大学)開学。</p> <p>昭和 28 年 (1953) 俳人山口誓子、苦楽園に定住。</p> <p>昭和 31 年 (1956) 西宮ヨットハーバー開設。</p> <p>昭和 34 年 (1959) ライオンと豹の混血獣、レオパンが甲子園阪神パークに誕生。</p>
--	--

<p>昭和40年(1965)阿川弘之『山本五十六』に西宮浜や香櫨園の海岸が登場。</p> <p>昭和41年(1966)野間宏『青年の環』に当時の西宮の雰囲気が描かれる。</p> <p>昭和41年(1966)鳴尾競馬場で飛行機を作成した稲垣足穂のエッセイ風小説『ヒコーキ野郎』に香櫨園浜、鳴尾浜が登場。</p> <p>昭和43年(1968)野坂昭如『火垂るの墓』は戦争中の阪神間、とくに夙川が主要な舞台。ユネスコが日本文学代表作品翻訳シリーズとして仏語訳で出版(2006)。</p> <p>小松左京『くだんのはは』は甲山近辺に伝わる牛女の伝承を取材して書いた小説。</p> <p>昭和44年(1969)司馬遼太郎『世に棲む日日』に西宮が登場。</p> <p>昭和48年(1973)遠藤周作『口笛をふく時』に阪神間と当時の学生の様子がうかがえる。</p> <p>昭和51年(1976)遠藤周作『砂の城』に甲東園駅や甲山が出てくる。</p> <p>昭和53年(1978)宮本輝『青が散る』の連載始まる。阪神間とそこで生きる若者が作品を構成。</p> <p>かんべむさし『決戦・日本シリーズ』は、阪神タイガースと阪急ブレーブスが日本シリーズで夢の対決。勝ったほうの電車が負けたほうの路線を凱旋パレードで走る。</p> <p>昭和54年(1979)司馬遼太郎『菜の花の沖』に西宮港の様子等、江戸時代の西宮近辺の様子が描かれる。</p> <p>村上春樹『風の歌を聴け』の舞台は阪神間。</p> <p>井上靖『昨日と明日の間』に夙川の松並木や香櫨園が出てくる。</p> <p>昭和57年(1982)宮本輝『錦繡』は、香櫨園に住む女性などの女語りとともに阪神間の雰囲気が作品を特徴づける。</p>	<p>昭和37年(1962)堀江謙一が西宮から出港、太平洋を単独航海に成功。映画化される。</p> <p>昭和38年(1963)西宮市が文教住宅都市宣言。</p> <p>昭和39年(1964)甲子園短期大学開学。</p> <p>昭和40年(1965)夙川学院短期大学開学。</p> <p>昭和41年(1966)大手前大学開学。</p> <p>昭和44年(1969)聖和大学開学。</p> <p>昭和45年(1970)神呪寺の俳人塚で供養祭がはじまる。</p> <p>昭和47年(1972)西宮市大谷記念美術館開館。兵庫医科大学設置。</p> <p>昭和48年(1973)瀬川美術館開館。</p> <p>昭和49年(1974)黒川古文化研究所が芦屋から移転。</p> <p>昭和51年(1976)辰馬考古資料館開館。</p>
--	---

<p>昭和59年(1984)田辺聖子『姥ざかり』が阪神間の老女をユーモラスに描く。</p> <p>平中悠一『シーズ・レイン』は、芦屋・西宮・神戸を舞台に若者の美学を描く。</p> <p>昭和63年(1988)玉岡かおる『夢食い魚のブルー・グットパイ』は、関西学院のキャンパスがモデル。</p> <p>平成4年(1992)村上春樹『国境の南、太陽の西』に阪神間の戦後の特徴が記される。</p> <p>平成7年(1995)小松左京『大震災』は、阪神間を襲った震災を総合的に分析。</p> <p>阪神間を舞台にした小説を発表して注目されているキョウコ・モリのニューヨークタイムス「ベストブック賞」を受賞した小説『シズコズ ドーター』が逆輸入される。</p> <p>平成8年(1996)貴志祐介『十三番目の人格 ISOLA』が阪神大震災を題材に。</p> <p>平成16年(2004)玉置通夫『甲子園球場物語』は、高校野球の聖地となった甲子園球場の80年にわたる歴史をつづる。同球場でおこなわれた歌舞伎公演のエピソードなども。</p> <p>平成17年(2005)直野祥子『夙川ひだまり日記』は、震災で愛した街と家が崩壊し、記憶のなかにだけ生き残った、昭和30年代の六甲山が見える阪急沿線の暮らしを描き出した絵日記。</p> <p>平成19年(2007)泉高弘『西北バー物語』は、震災前後の三年間の阪急西宮北口駅周辺(通称にしきた)を描く。</p> <p>平成20年(2008)有川浩『阪急電車』は、阪急今津線の片道15分間の物語。映画化される。</p> <p>平成23年(2011)田中元三『夙川の岸辺から』は、尼崎で文芸愛好家の集まる喫茶店「獨木舟」を営んだ著者が夙川に転居して著した随想。</p>	<p>昭和61年(1986)西宮市が西宮湯川(秀樹)記念賞を制定。</p> <p>昭和63年(1988)西宮市西田町に西田公園万葉植物苑オープン。</p> <p>平成4年(1992)甲子園に住んだ俳人・阿波野青畝が死去。 平成5年(1993)堀江オルゴール博物館開館。</p> <p>平成7年(1995)阪神・淡路大震災</p> <p>平成12年(2000)西宮神社で海上船渡御祭が400年ぶりに復活。</p> <p>平成17年(2005)西宮市高松町に兵庫県立芸術文化センター開館。</p> <p>平成18年(2006)谷川流のライトノベル『涼宮ハルヒの憂鬱』がアニメに。</p> <p>平成21年(2009)西宮市殿山町に上田安子記念館開館。甲南大学が西宮北口に新キャンパスを開設。</p>
---	---